

開 会 午後0時58分

●松井隆文委員長 ただいまから、経済観光委員会を開会いたします。

報告事項は、特にございませぬ。

それでは、議事に入ります。

スノーリゾートシティSAPPORO推進戦略(案)についてを議題とし、理事者から説明を受けます。

●芝井観光・MICE担当局長 本日は、スノーリゾートシティSAPPORO推進戦略の案についてご説明を申し上げます。

この推進戦略につきましては、雪のまち札幌の魅力を最大限に活用して、観光客の増加や滞在期間の長期化によって、冬季の観光消費の拡大を図るために、スノーリゾートとしてのブランド化に取り組むものでございます。

スノーリゾートの推進に向けましては、この地域が一体となって取り組むことが重要でありますことから、昨年度、有識者や市内スキー場関係者などから成る検討委員会を4回にわたって開催しながら策定作業を進めてまいりました。

本日の委員会でご意見をいただきました後、パブリックコメントを行って、今年の秋頃をめどに計画策定をする予定でございますので、ご審議のほどをよろしく願いいたします。

それでは、推進戦略の案の内容につきまして、観光・MICE推進部長から説明申し上げます。

●石井観光・MICE推進部長 私から、スノーリゾートシティSAPPORO推進戦略(案)についてご説明いたします。

お手元にあるA3判の推進戦略(案)の概要資料をご覧ください。

まず、第1章ですが、二つの目的を記載しております。

一つ目は、スノーリゾートとしてのブランド化を推進し、インバウンドをはじめとした観光客の増加及び滞在期間の長期化により、冬季の観光消

費拡大を図るため、市内スキー場、関係事業者、関係団体、行政が一体となって取り組むための指針を策定することとしております。

二つ目は、新型コロナウイルス感染症で大きな打撃を受けた札幌観光の回復に資するとともに、冬季オリンピック・パラリンピック開催に向けた機運醸成や、市民のウインタースポーツ振興に寄与することとしています。

次に、計画期間ですが、令和3年度から令和12年度の10年間としております。

続きまして、第2章・第3章、現状分析でございます。スキー市場の動向や札幌の冬季観光の現状などについて分析しております。

一つ目は、スキー市場の動向です。

右の表1は、過去5年間の国内スキー人口の推移を表したもので、日本人スキー客は5年で2割減少しています。一方で、海外スキー客は5年で2倍以上となっています。特に、オリンピックを控える中国では、スキー人口が急増しており、今後もインバウンドスキー客の市場拡大が見込まれます。

二つ目は、冬季の札幌観光の現状です。

右の表2は、平成30年度の来札観光客数の月別内訳を示したもので、インバウンドが12月から3月の冬季閑散期を補う存在であることを示しています。また、スキー体験者は、宿泊日数が長く、周遊観光のニーズも高い傾向にあることから、今後はスキーと観光の両方の魅力を訴求することで、冬季の観光客と観光消費拡大の可能性が期待できます。

三つ目は、観光インフラです。

札幌には冬も楽しめる観光コンテンツが多数存在しているほか、宿泊施設が充実しており、冬季のキャパシティには余裕があります。圧倒的に豊富な観光インフラは札幌の大きな強みとなっています。

四つ目は、市内スキー場の現状です。

平成30年度の市内6スキー場の来場者数は約96

万人で、利用者の内訳は8割程度が市民、1割程度が国内、残りの1割程度がインバウンドでございます。

次に、来札観光客の市内スキー場認知度ですが、国内観光客は51.9%、インバウンドは55.9%と、高いとは言えません。また、市内スキー場に設置されているリフトは全体の6割以上が築30年以上であり、老朽化が進んでいます。このように、市内のスキー場は観光コンテンツとしての高いポテンシャルが十分生かされておらず、認知度向上や老朽化対応が課題として挙げられます。

続きまして、資料の右側、第4章の1. 目指す将来像でございます。

ここでは、札幌が目指すスノーリゾートの将来像について記載しております。

まず、基本的な考え方です。

市内スキー場やスノーアクティビティ等の雪体験コンテンツの魅力さをさらに高め、雪のまちな魅力観光客の誘客に最大限に活用するとともに、札幌でしか実現できない、まち全体で冬を楽しむ都市型スノーリゾートシティとしてのブランド化を目指すこととしています。

次に、将来ビジョンです。

ここでは、提供価値や顧客像、提供方法といった三つの観点から将来ビジョンを整理しております。具体的には、大都市に滞在しながら本格的な雪体験ができるという世界で唯一の価値を、雪体験と都市観光の両方を求める多様なニーズを持った幅広い層の観光客に、手軽に快適に効率的に楽しめる一体的なサービスとして提供することで、雪のまちな魅力と国際観光都市の魅力とが融合した世界で唯一の大都市スノーリゾート、スノーリゾートシティSAPPOROとしてブランド化を目指すこととしています。

続きまして、ブランドイメージです。

雪の魅力を表すPowderと都市を表すCityという二つのキーワードを掛け合わせ、大都市にパウダースノーが降り積もる札幌ならではの

情景をイメージさせるPowder in the Cityをブランドコンセプトと設定しています。

次に、広域連携ビジョンです。

右の図は、札幌から各エリアへの冬のアクセス時間を表したものです。札幌から車で2時間の範囲に世界的認知度のあるスノーリゾートが点在しております。また、新幹線延伸により、ニセコまで30分以内と飛躍的にアクセスが向上することを踏まえ、道内スノーリゾートと連携し、北海道全体のスノーリゾートとしての価値を高め、一大スノーリゾートエリアとしての世界的ブランドの確立を目指すこととしています。

資料をおめぐりいただきまして、第4章の2. 誘客の方向性です。

スキーが主目的の観光客を札幌に誘客する誘客戦略1と、札幌観光が主目的の一般旅行者を雪遊びやスキーに誘導する誘客戦略2の二つの戦略でアプローチすることとし、それぞれの戦略に応じた居住エリア別のターゲットを設定しております。

次に、第4章の3. スキー場の将来像です。

こちらの表は、札幌が目指す将来ビジョンの実現に向けて、市内6スキー場の特徴を踏まえ、それぞれの期待される役割、将来像を整理したものです。あわせて、戦略上の位置づけを記載しています。サッポロテイネと札幌国際は本格的スキーヤーのニーズにも対応できる大規模スキー場、さっぽろばんけいと札幌藻岩山は、都心部との近さを生かして、観光とセットで楽しむのに適した中規模スキー場、フッズスノーエリアと滝野スノーワールドは初体験でも安心して楽しめる初心者向けスキー場と、それぞれ位置づけております。

続きまして、資料の右側、第5章、具体的な取組です。

将来ビジョンの実現に向けて、推進が必要な取組について、三つのテーマと六つの基本方針で整

理しています。

まず一つ目のテーマは、雪のまちの魅力と観光都市の魅力を融合した札幌ならではの魅力創出で、三つの基本方針より構成されています。

基本方針①の観光客の多様なニーズに対応できるスキー場へのレベルアップでは、重点取組をスキーヤーの満足度を高める施設整備やサービス提供に設定し、観光客向けレッスンの充実や土地利用の検討などを進めることとしています。また、観光コンテンツとしてのスキー場の魅力創出では、展望台やカフェなど、スキーをしない観光客も楽しめるコンテンツの充実を図っていききたいと考えております。

基本方針②の雪のまち札幌ならではの観光コンテンツの充実では、重点取組をウインタースポーツ体験コンテンツの充実を設定し、アカプラスケートリンクなど、体験型のコンテンツを充実させたいと考えております。

基本方針③のブランド力向上や周遊促進に向けた事業者連携の推進では、重点取組を市内6スキー場のトータルブランディングの推進に設定し、6スキー場の一体化を象徴する商品や企画、開発を進めることとしています。

次に、二つ目のテーマは、観光客の満足度向上と効果的な誘客を目指した魅力の提供で、二つの基本方針より構成されています。

基本方針④の来訪者の満足度を高めるストレスフリーなサービス・インフラの提供では、重点取組をスキー場や観光施設等へのアクセス向上に設定し、シャトルバスの利便性向上などを行っていききたいと考えております。

基本方針⑤のスノーリゾートとしてのブランド化を目指したマーケティングの強化では、重点取組を世界的認知度向上に向けた一体的な情報発信に設定し、多言語ウェブサイトでの一体的発信などを進めたいと考えております。

続きまして、三つ目のテーマは、道内スノーリゾートとの周遊を促す広域連携です。

基本方針⑥の道内スノーリゾートとの広域連携の促進では、重点取組を道内スノーリゾートと連携したプロモーションに設定し、北海道スキープロモーション協議会や北海道索道協会などとの連携を図っていききたいと考えております。

最後に、資料下段の第6章、推進体制と進行管理です。

左の組織体制図は、現状の推進組織でありますスノーリゾートシティSAPPORO推進協議会の体制図となっています。今後、推進戦略に基づく取組を地域一体となって推進するため、関係事業者や関係団体との連携を強化し、主体的に事業に取り組む上で、法人格を有する新たな推進組織の設立を目指すこととしています。また、新たな推進組織の設立に当たっては、観光庁が推進する観光地域づくり法人であるDMOとしての登録も視野に、組織体制の在り方について検討することとします。

次に、進行管理、成果指標です。

取組の進捗状況の定期的な把握や点検をしながら、取組の見直しをしていくとともに、関係者と進捗状況を共有していくこととします。また、計画期間の前期はコロナからの回復期、中期は本格的な誘客期、後期はブランド確立期と位置づけ、段階的に取組を推進することとします。

なお、成果指標には、冬季来札観光客の市内スキー場認知度、市内スキー場来場者数、雪体験目的の来札観光客数の三つを掲げ、進捗管理を行うこととします。

以上で、スノーリゾートシティSAPPORO推進戦略（案）の説明を終わらせていただきます。

●松井隆文委員長　それでは、質疑を行います。

●小竹ともこ委員　冒頭のご説明でありましたように、この計画案の策定に当たりましては、専門的な立場からのご意見、ご指摘等をいただくために、学識経験者や観光関連事業者の方など、業

界を代表される方々で構成された検討委員会において、まさに的を射た貴重なお話があったということをおも承知しております。そこでも議論をされておりましたこのような計画案を推進していくために欠かせないブランディング化、そして、ターゲットをどこに絞っていくかなどを含めての徹底したマーケティングは非常に重要であろうという観点から、私からは2点質問をさせていただきます。

札幌は個性豊かな魅力を備えた六つのスキー場が都心から車で60分以内に点在しており、大都市に滞在しながら手軽に本格的なスキーが楽しめるという、世界的にも非常に貴重な魅力を備えた都市であります。サッポロティネや札幌国際スキー場からは海が望めますし、札幌藻岩山スキー場では、スキーをしながら日本新三大夜景にも選ばれている夜景を楽しむことができるなど、それぞれのスキー場が大変魅力あふれるロケーションにあり、すばらしい観光資源に恵まれていると私は確信しております。

また、札幌は、スキーのほかにも、羊ヶ丘展望台やモエレ沼公園などの市内各所でスノーアクティビティーや雪遊びが楽しめますし、一方では、充実した都市機能や豊富な観光コンテンツを備えていることから、まち全体で冬の魅力を楽しむことができる都市でもあります。そして、何より札幌市は、1972年、昭和47年に冬季オリンピックが開催されたというレガシーを有するまちであり、スノーリゾートとしてのポテンシャルは極めて高いと考えております。

それにもかかわらず、ただいまご説明をいただいた戦略(案)の現状分析、市内スキー場の現状によりますと、札幌に来ている観光客の約半数が札幌にスキー場があること自体を知らなかったというアンケート結果が示されておりまして、せっかくの札幌の高いポテンシャルが生かされていないことを非常に残念に思う気持ちとともに、本当にもったいないなと感じているところでもあります。

す。

ここでは、市内スキー場の現状分析による課題として認知度向上と老朽化が挙げられておりますけれども、私は、課題の一つとして挙げられている認知度についてお聞きしたいと思います。

スキー場の認知度に関しましては、戦略(案)の成果指標では、冬季来札観光客の市内スキー場認知度を令和12年度までに90%まで高めることが目標とされておりまして、目標値を高く設定することは大事なことでありまして、その必然性も必要性も認めるところではありますけれども、現状では約半分の方が市内スキー場の存在を知らないことを踏まえますと、90%というのは非常に高く厳しい目標設定ではないかとも言えるのではないのでしょうか。

そこで、最初の質問をいたしますけれども、市内のスキー場の認知度が低い理由をどう捉えておられて、また、どのようにその認知度を向上させていくおつもりなのかを伺います。

●石井観光・MICE推進部長 市内スキー場の認知度向上についてお答えいたします。

市内スキー場は、これまで、市民利用を主なターゲットとした各スキー場単体のプロモーションを行ってきており、観光資源として積極的に広く発信できてこなかったことが認知度が低い要因ではないかと考えてございます。

今後は、ウェブサイトやSNS、観光パンフレットなど、幅広い媒体や機会を活用し、雪の魅力、雪のまちの魅力と国際観光都市の魅力を併せ持つ世界で唯一の都市型のスノーリゾートとして、国内外に積極的に発信していきたいと考えてございます。

また、札幌を訪れた観光客に、旅の途中においてもスキー場など市内で楽しめる雪体験メニューの情報を届けられるよう、宿泊施設や観光案内所等での情報発信を強化するなど、市内スキー場の認知度向上を図ってまいりたいと考えてございます。

●小竹ともこ委員 これまで市内の各六つのスキー場が単体でということ、これからは、やはり、まさにブランディング化ということで、一体となって市内の六つのスキー場がそれぞれに連携も図り、そしてまた、そのことをSNS、ウェブサイトなどで発信を強めていっていただきたいなと考えているところであります。

続きまして、戦略（案）の現状分析では、観光客の移動手段は公共交通機関を利用する割合が最も高く、さらに、国内観光客よりもインバウンドの方のほうが公共交通機関を利用する割合が高いというアンケート結果が示されております。

また、冬期間では、当然、慣れない雪道の運転がネックとなるかと思えますけれども、レンタカーの利用割合が大きく下がりました、逆に、公共交通機関や貸切りバスの利用割合が高くなっているとのことで、インバウンドの方々については約5割の方が公共交通機関を利用するとの結果が出ています。しかし、観光客が公共交通機関でスキー場を訪れようとした場合、都心部からダイレクトにアクセスできる交通手段が少ないため、乗換えに手間や時間がかかるといった問題があるとのことであります。

札幌を訪れる観光客に雪体験と都市観光の両方を楽しんでいただきながら、スノーリゾート滞在中の満足度を高めていただくためには、拠点間のアクセスにかかるストレスをいかに減らせるかが重要と考えます。

そこで、二つ目の質問であります、スキー場へのアクセス向上に向けてどのように取り組んでいくのかを伺います。

●石井観光・MICE推進部長 スキー場へのアクセス向上についてお答えいたします。

雪のまちの魅力と国際観光都市の魅力を効率的に楽しんでもらうためには、観光客が都心部の宿泊施設等からスキー場に快適に移動できることが重要と認識してございます。

そのため、戦略（案）では、スキー場にダイレ

クトにアクセスできるシャトルバスやタクシーの利便性向上、公共交通機関の分かりやすい利用案内といった取組をアクセス向上の重要取組として掲げているところでございます。

また、スキー客にとって手荷物を持って移動することが大きな負担となることから、スキー用具のレンタルや荷物配送サービスなどの充実も目指すこととしてございます。

これらの取組により、交通手段の利便性向上と手ぶら観光の環境を整備することで、観光客のスキー場へのアクセス向上を図ってまいりたいと考えてございます。

●小竹ともこ委員 スキー場へのアクセス向上に向けてということで、今ご答弁いただきました。これだけではなく、やはりスキー場への魅力を高めるために、老朽化した施設のリニューアルや新たな施設整備のための土地利用の検討は重要な課題だと感じておりますので、スキー場に新たな投資を行う、また、投資を呼び込むことが可能となるような様々な規制緩和を含めて、ぜひとも検討を進めていただきたいと思っております。

また、世界を魅了する都市型スノーリゾートシティを目指して、市内スキー場のリゾート化を推進していく、そして、道内他都市と連携して一大スキーリゾートエリアとしての世界的ブランドの確立を目指すというのは、市長の公約でもあります。

この推進戦略に基づく取組によりまして、冬季オリンピック・パラリンピック招致の機運醸成につなげていくという大きな目的を持って、この計画をしっかりと進めていただくことを求めまして、私からの質問を終わります。

●成田祐樹委員 スノーリゾートシティSAPORO推進戦略（案）について何点か質問をしたいと思いますが、まずは、インバウンドスキー客の受入れ環境の整備についてお伺いしたいと思います。

かつてスキーが栄えていた1980年から90年代に

は、スキー場は、本当に混雑を極め、大きく盛り上がっていたことを記憶しています。テレビのCMでもスキーに関するものがたくさん流れていたのを覚えています。その後、バブルがはじけたのと重なるように、徐々にスキー客が減ってきて、市内のスキー場も苦しい状況が続いていると思っております。コバワールドや真駒内スキー場といった市街地から近いスキー場も営業をやめてしまったのが、つい昔のように感じております。

ただ、時代は変わり、昨今では、LCCをはじめとした格安航空会社の台頭をはじめ、新千歳空港を結ぶ国内線の飛行機の便数も増えたことで札幌への観光客数は年々増え、さらに、国際便が増えたことによるインバウンドの増加は目を見張るものがありました。

今回出されたこの戦略(案)の中にある札幌市が行った調査にもありましたが、インバウンドの認知度や目的、行動特性がよく調査されていて、思った以上にインバウンドがスキー場に来ていることが把握できたことや、今後も体験型観光に注目が集まること、また、それらが観光客の単価を押し上げるということを考えると、このスノーリゾートシティSAPPORO推進戦略(案)については、大変期待をしているところです。

戦略(案)の現状分析にも記載されているとおり、北米だけではなく、タイや中国などといったアジア圏からのインバウンドスキー客は増加傾向にあり、新型コロナウイルス感染症が収束後の観光需要の回復に向けても、インバウンドスキー客の誘致は重要な課題になるかと思っております。

ただ、札幌の戦略として、ターゲットのメインを、本格的に行うスキー客ではなく、シティーリゾートを含めて楽しむ初級者に向けた売り込みをするのであれば、その初体験を楽しい思い出にしようということが大切になるのではないかと思います。

昨年の予特のときにも、私はインバウンドのスキー客の受入れをインストラクターとして行った

という話をさせていただきましたが、やはり札幌市民が自分の子どもにスキーを教えるのかと全く違って、やっぱり海外から来られた方は、なかなか、スキーをどうやって履くのかもよく分からない、見たこともないというところからスタートすることを考えると、やはり教えるのがすごく難しいですし、やっぱり言葉の問題というのが非常に大きな壁になったなというのは、自らインストラクターやっていて痛感しました。

そのようなことを考えると、インバウンドのスキー客の誘致に向けては、インストラクターの多言語化対応が重要であり、特にスキーを初めて行う層にとって、一定程度滑ることができるレベルまでのサポートというのが大切になりますし、そのことはリピーターをつかむきっかけになると思われま

す。また、市内のスキー場には、意外にもインバウンドが気軽に楽しめる初心者向けのコースが少ないというふうに感じております。特に、札幌市内のスキー場の緩斜面については、左右で高さが違う、いわゆる横にも傾斜がある片斜面というところが多く、滑っていると片側に流されてしまうので、本当に初めてスキーを行う人にとっては、もう少しだけ斜面の整備があるとよいなといったようなハード整備面での課題もあるかと思います。

様々な課題がある中での質問になるのですが、インバウンドスキー客の受入れ環境の整備についてはどのように取り組んでいくのか、お伺いしたいと思います。

●石井観光・MICE推進部長 インバウンドスキー客の受入れ環境の整備についてお答えさせていただきます。

戦略(案)では、インバウンドを重要な誘客ターゲットとして位置づけておまして、多様な国から訪れるスキー客がストレスを感じることなく施設を利用でき、知りたい情報を収集できることが不可欠であると認識しております。

そのため、スキー場における各種案内表示の多

言語化はもちろん、ニーズに合ったスノーコンテンツを満喫していただけるよう、スノーリゾートシティSAPPOROの様々な情報を一体的に発信する多言語ウェブサイトの充実を図ることとしてございます。

さらに、主要なターゲットとなる東アジアや東南アジアからの観光客に多い初・中級スキーヤー向けに多言語インストラクターの確保や観光客向けレッスンプログラムの充実に加えて、コースの整備、改良なども目指してまいりたいと考えてございます。

●成田祐樹委員 ぜひこの多言語化については進めていただきたいなというふうに思っております。本当にインストラクターの単価がやっぱりインバウンドだと非常に高いと。プライベートレッスンが多いので、これはインストラクターをやっている方の収入にもつながるということをぜひ念頭に実施していただきたいなというふうに思っております。

次に、雪体験コンテンツの多様化についてお伺いしたいと思います。

札幌が目指す将来ビジョンとして、多様なニーズを持った幅広い層の観光客が顧客像として想定されており、スキー客だけでなく、スキーやスノーボードをしない観光客であっても楽しめる魅力を高めていくということも重要ではないかと思っております。

戦略（案）の現状分析を見ますと、市内スキー場を訪れたインバウンドの15%程度はスキーやスノーボードを実施しておらず、特に東南アジアでは40%程度が未実施となっていることから、これらの層のニーズに対応することが求められると思っております。

特に、小さな子ども連れのファミリーやあまり体力の自信ない人にとっても楽しめるそりやチューブ滑りなどといったスノーアクティビティを充実させる必要があるのではないのでしょうか。

また、このアジア圏の皆さんは、写真とか動画を撮ってSNSに上げるということが非常に好きですね。そのスキーやスノボだと、どうしても滑っているシーンを撮るとのこと自体もなかなか難しいので、こういったそのアクティビティの宣伝、発信という意味合いでも、こういった誰もが体験できそうで、かつ絵になるようなアクティビティというのは非常に重要度を増すのではないかなというふうに思っております。

そこで、質問ですが、雪体験コンテンツの多様化に向けては、どのように取り組んでいくのか、お伺いしたいと思います。

●石井観光・MICE推進部長 雪体験コンテンツの多様化についてお答え申し上げます。

戦略（案）では、スキー目的の旅行者だけではなく、観光目的の旅行者に気軽に雪体験が楽しめるサービスやコンテンツを提供することも重要な取組と位置づけてございます。

そのため、都市観光と雪体験を併せて楽しめる札幌ならではの魅力を観光客に感じていただけるよう、スケートやクロスカントリーなどのウィンタースポーツを都心部でも体験できるようなコンテンツの充実を図ってまいりたいと考えてございます。

また、スキー場におけるキッズパークの拡充、近郊地域や定山溪におけるスノーシューを使った雪見ツアーやチューブ滑りなど、気軽に楽しめる雪遊びやスノーアクティビティの多様化も進めてまいりたいと考えてございます。

●成田祐樹委員 私たちが、えっ、そんなものがアクティビティになるのかと思うようなことでも、こういった雪のない地域の人からすると非常に貴重なコンテンツになるということがありますので、ぜひ様々な試験だったりいろいろな試行を重ねながら、コンテンツの多様化に向けて取り組んでいただきたいなというふうに思っております。

次に、新たな推進組織の検討に当たっての課題

認識についてお伺いしたいと思います。

スノーリゾートとしてのブランド化に向けては、スキー場だけではなく、観光関連事業者や関係団体など、多くの関係者を巻き込み、まち全体で取り組んでいくこと、そして、それを何度も何度も発信していくことが重要かと思っております。

札幌においても、そのような考え方にに基づき、令和2年5月に市内6スキー場、それから、観光協会、商工会議所などが構成員となり、札幌市が事務局を務めるスノーリゾートシティSAPPRO推進協議会が設立されたと聞いております。当面は、この協議会が戦略推進組織としての役割を担っていくことになるかと思うのですが、各行政機関や民間事業者との連携体制を強化し、主体的に事業に取り組むため、観光庁が推進する観光地域づくり法人、いわゆるDMOとしての登録も視野に組織体制の在り方について検討することとしているようです。

この推進組織の体制強化は必要だと考えますが、このDMOを念頭とした新たな推進組織には、スノーリゾート経営のかじ取り役を担う実行力を有し、かつ、収益力を有した、この稼ぐ力を持ったというのが一番難しいと思うのですが、持続可能な組織体制であることが求められるということを見ると、この設立に向けては十分な検討が必要なのではないかなと考えております。

そこで、質問ですが、新たな推進組織を検討するに当たり、どのような課題認識を持っているのか、見解をお伺いしたいと思います。

●石井観光・MICE推進部長 新たな推進組織の検討に当たっての課題認識についてお答え申し上げます。

戦略(案)に基づく取組を地域一体となって推進するためには、スノーリゾートシティSAPPROのかじ取り役となり、関連事業者や関係団体との調整や、戦略全体のマネジメントを担う推進組織の役割が重要になると認識してございま

す。

推進組織の体制強化に向けましては、法人格を有する新たな推進組織の設立を目指すこととしておりますが、その検討に当たりましては、委員のご指摘のとおり、持続可能な組織としていくための運営資金の確保や、専門的な人材の確保などが課題になるものと考えてございます。

今後は、他の地域における先進事例も参考にしつつ、関係者とも協議しながら、組織体制の在り方について検討してまいりたいと考えてございます。

●成田祐樹委員 既にDMOを先行しているところもございすけれども、やはり、地域的にそこまで人口が多くなかったり、なかなかコンパクトにうまくまとまっているところもある一方で、やっぱり札幌はなかなかタスクが多くて大変かなというのは十分承知しておりますが、その中でも、ぜひ持続できるような体制をつくっていただきたいというふうに思っております。

最後に要望なのですが、今質問させていただいたこの三つの話は、分けて考える話ではないと思っているのですね。一番最初のインバウンドの受入れ環境の話もそうなのですが、例えば、緩斜面を確かにつくった、でも、その横でチューブ滑りをするといっても、実はスキーの一番最初に滑る斜度でチューブ滑りは実はなかなかできなくて、もうちょっと急じゃないとチューブ滑りはうまくいかないのですね。

なので、初心者向けのゲレンデの横でチューブ滑りというのは、斜度が変わってくるので、なかなかそれを一緒にやるのは難しい。そしてまた、札幌のスキー場も、初心者の斜面も幅広ではないので、その横で、スキー場の斜面の一部を使ってスノーアクティビティーを行うというのも、果たしていろいろなスキー場でできるかということ、なかなか、いや、うちはちょっと厳しいですよということも出てくるかと思っております。そういったことになると、決してスキー場に限らず、既存の施

設をどこか活用するという事も考えられると
思っているのですね。

そこで、数年前から国交省が河川や公園利用な
どの規制緩和を打ち出して民間活力による整備手
法を創設する、いわゆる公募設置管理制度、P a
r k－P F Iを行っております。

札幌も、建設局がこの市場調査をやったのです
けれども、冬期間が課題になっているのです。冬
季での活用が見出せない。先ほどもおっしゃっ
ていただきましたけれども、クロスカントリー
だったりスケートというのも、当然こういったと
ころで、今できるのではないかなど。その建設局
が出したのは中島公園、百合が原公園、稲積公
園、農試公園と、平らなところばかりが候補に
なっていて、私も前々から、いや、これ、山の公
園を入れたほうがいいですよという話をしてい
て、旭山を入れたほうがいいですよという話をし
ていたのです。旭山公園のように中心部から近く
て駐車場もある、公共交通機関もある、景観もよ
くて斜面もそれなりに取れるというような既存の
資源が眠っていると思います。旭山公園も、こう
いうふうに使ったら駄目なのかなといういろいろ調べ
たら、元々、ここは、昔、温泉が出ていて、戦後
には温泉山スキー場として使われていました。こ
こはスキー場だったのですね。

そういったことを考えると、スノーアクティビ
ティーを行ってはいけないというような流れでは
ないと思いますし、こういった市が持っている資
源を試験的に活用して、こういったスノーアク
ティビティーを導入して、市場調査を行ってみ
る。これは経済観光が行うのかどうか分かりませ
んが、そういったこともできると思うのです。

滝野すずらん公園でやっているチューブ滑り
は、ロープ塔なんかを使って、固定の基礎を何か
やるようなこともやっていなくて、同じようなこ
とというのが、多分、チューブ滑りも、旭山でも
できるというふうに思っています。

また、市が管理しているので、当然、こういう

ような試験的にも使いやすいでしょうし、このP
a r k－P F Iの理念を考えれば、維持管理の収
益というのも収益の中で今度は建設局に落ちると
いうことも考えると、お互いにとってメリットが
あるというふうにも考えられます。

ぜひ、今後は、こういったスノーアクティビ
ティーの収益化について、もちろん民間事業者で
やってもらうというのがありますけれども、DM
O自体で収益化の調査検討をしていく、そのきっ
かけをつくっていただくということと、札幌の
持っている資源を見直して、これは所管がまたぐ
案件ですけれども、ぜひ建設局とも情報交換しな
がら活用していただくということを求めて、質問
を終わりたいと思います。

●好井七海委員 私からも、スノーリゾートシ
ティSAPPORO推進戦略(案)について、2
点伺います。

初めに、事業者連携の推進についてお伺いた
します。

我が会派では、スキー場をはじめとした札幌の
雪のまちな魅力を生かして、スノーリゾートとし
てのブランド化を進めることが冬季の観光閑散期
対策として有効であるとの考えの下、これまでに
も、代表質問や委員会での質疑の中で、その推進
の必要性を訴えてきたところであり、新型コロナ
ウイルス感染症が収束した後の札幌観光の回復に
も資する非常に重要な取組であると考えておりま
す。

このたび、札幌都市型スノーリゾートシティと
してブランド化することを目指した10年計画であ
りますスノーリゾートシティSAPPORO推進
戦略の案が取りまとめられたということで、いよ
いよ本格的に取組が動き出すものと期待しており
ます。

スノーリゾートとしてのブランド化に向けて
は、スキー場が中心となって取り組むことにな
ると思いますが、市内にある六つのスキー場は、他
地域のスノーリゾートと比較しますと、その規模

は小さく、宿泊施設や商業施設も併設されていないことから、スキー場単独での取組には限界があると思います。しかし、大都市札幌には観光インフラである宿泊施設や観光施設、商業施設が充実しており、市内スキー場と観光関連事業者が連携することで、スノーリゾートとしての可能性が大きく広がるものと考えます。

このたびの戦略（案）の中でも、この点について重要な要素として位置づけられており、基本方針③としてブランド力向上や周遊促進に向けた事業者連携の推進を掲げ、共通リフト券などのスキー場同士の連携や、スキー場と観光事業者との連携を推進することとしております。

そこで、最初の質問ですが、事業者連携の推進に向けてどのように取り組んでいくのか、お伺いいたします。

●石井観光・MICE推進部長 事業者連携の推進についてお答え申し上げます。

戦略（案）では、目指す将来ビジョンとして、雪のまちの魅力と国際観光都市の魅力との融合を掲げ、関連する事業者が連携して取り組むことで、冬季の観光客の増加や観光消費の拡大を目指すこととしてございます。

まずは、市内6スキー場の連携が重要となりますことから、6スキー場が連携した商品の企画販売や連携イベントの実施などにより、一つのスノーリゾートとしての一体感を醸成してまいりたいと考えてございます。

また、スキー場だけではなく、観光事業者との連携を図ることにより、経済的な波及効果を最大限に発揮できるよう、スキー場と飲食店や観光施設等が連携した周遊企画など、多くの事業者が参画できるような取組も進めてまいりたいと考えてございます。

●好井七海委員 市内の六つのスキー場との連携はもちろんですけれども、スキー場だけでなく、他の関連した事業者ともしっかり連携していくというご答弁だったと思います。

続いて、広域連携ビジョンの実現に向けた他地域との連携についてお伺いいたします。

欧米豪を中心とした海外の本格的なスキーヤーを呼び込むためには、札幌がスノーリゾートとしてブランド化するだけでは不十分であり、北海道全体で広域的なスノーリゾートを形成し、世界に発信していくことが不可欠であることは、これまでも重ねて主張してきたところであります。

このたびの戦略（案）を見ますと、第4章の目指す将来ビジョンとして、広域連携ビジョンを掲げ、第5章の具体的な取組の中でも、基本方針⑥として、道内スノーリゾートとの広域連携の促進に取り組むこととされており、道内のスノーリゾートとの連携がしっかりと戦略の柱に位置づけられていることは評価できます。

札幌がスノーリゾートとしてブランド化することはもちろん重要であります。やはり、この戦略の最終的なゴールは、北海道全体で世界的なブランド力を確立するという広域連携ビジョンではないかと考えておりますので、広域連携ビジョンの実現までを見据えた長期的な視点に立った取組をしっかりと進めていただきたいと思います。

広域連携ビジョンの実現に向けては、ニセコ、ルスツ、富良野など、既に世界的なスノーリゾートとしての認知度を得ております先進的なそのリゾート地域といかに円滑な連携体制を構築していくかが課題となります。

そこで、二つ目の質問であります。広域連携ビジョンの実現に向けて、他地域との連携をどのように進めていくのか、お伺いいたします。

●石井観光・MICE推進部長 広域連携ビジョンの実現に向けた他地域との連携についてお答え申し上げます。

戦略（案）では、北海道に長期滞在しながら、道内のスノーリゾートを周遊するスキーヤーに対して、札幌が持つ周遊の拠点としての機能や都市観光の魅力を提供することで、北海道全体のブランド価値向上を目指すこととしてございます。

この広域連携ビジョンの実現に向けましては、他のスノーリゾート地域と連携したプロモーションや周遊の利便性向上、案内機能の強化など、北海道全体として相乗効果が発揮される取組が必要になるものと考えてございます。

これらの取組を進めるに当たっては、道内の先進的なスノーリゾートとの円滑な連携体制を構築することが不可欠であり、関連する事業者や自治体との関係性をしっかり築いてまいりたいと考えてございます。

●好井七海委員 道内の先進的な自治体との連携、また、関連する事業者との連携という部分をしっかり進めていくというご答弁だったと思います。

最後に要望ですが、道内のスノーリゾート地域は、スノーリゾートとしては札幌よりもはるかに先輩でありますので、連携体制の構築に向けては、関係する自治体にはこちらから足を運んで、スノーリゾートとしてのノウハウについてアドバイスを受けるところから始めていただき、しっかりと信頼関係を築いていただくことが大切だと思っております。

その上で、北海道全体のスノーリゾートとしての発展を目指して、関係する市町村が一体となって取り組んでいけるように、札幌市が牽引役となって推進していくことを要望しまして、私の質問を終わります。

●村上ひとし委員 私は、スノーリゾートシティSAPPORO推進戦略に関しまして、今年の3月の予算特別委員会でも取り上げさせていただきました。そのときは、市内にスキー場がありますけれども、老朽化しているということなどで、市民のスキー場の魅力の向上をどう考えるのかということと、札幌市が目指すそのスノーリゾートのコンセプトをどう考えているのかというようなことなどを質問させていただきました。

今日は、新型コロナウイルス感染症の教訓を生かしたスノーリゾートの推進についてと、二つ目

は、広域連携ビジョン、札幌周辺地域の魅力を生かした取組について、2点お伺いをしたいと思います。

まず最初に、新型コロナウイルス感染症の教訓を生かしたスノーリゾートの推進についてであります。

現在、新型コロナウイルスについては、感染がやや沈静化の傾向であるものの、札幌市でも初めてデルタ株が確認されるなど、まだまだ予断を許さない状況が続いております。東京などの感染の再拡大、7月中にはデルタ株が半数から7割くらいに達することも懸念されるという専門家の指摘もあります。この推進戦略(案)の第1章 推進戦略の策定に当たっての目的の中で、新型コロナウイルス感染症で大きな打撃を受けた札幌観光の回復に資するというふうに書かれております。それから、第6章の推進体制と進行管理の中では、前期はコロナからの回復期を目指して取組を進めていくというようなことであります。

私は、感染症というのはしばらく続くであろうと思いますし、その対策をどうこの戦略に生かしていくのかということも重要であると思います。スノーリゾート推進の取組を進めるに当たっては、スキー場、宿泊施設、飲食店、様々な観光施設など、スノーリゾートに関わるあらゆる事業者と、そこで働く方々が協働して高いレベルの感染症対策に取り組むことが必要だと思えます。

そこで、お尋ねをいたしますが、新型コロナウイルス感染症の今までの教訓を生かしたスノーリゾートの推進についてどのように認識されているのか、お伺いをいたします。

●石井観光・MICE推進部長 今までの教訓を生かしたスノーリゾートの推進についてお答え申し上げます。

戦略(案)のロードマップにおきましては、計画期間の前期をコロナからの回復期と位置づけ、感染の収束状況に応じて段階的に誘客を強化していくこととしておりますが、特に回復期における

取組に当たりましては、十分な感染症対策を実施することが前提になるものと考えてございます。

感染症対策につきましては、委員がご指摘のとおり、市内スキー場、関連事業者、関係団体、行政が連携して取り組むことが必要であり、各業種におけるガイドラインやこれまでの経験で培ったノウハウを生かしながら、効果的な対策が取られるよう努めてまいりたいと考えてございます。

●村上ひとし委員 ぜひ充実した対策を取っていただきたいと思うのですね。やっぱり北海道が感染の問題でも非常にレベルの高い対策を取っているという意味で、具体的に安全・安心なのだということは極めて重要であると思います。

次の質問であります、広域連携ビジョン、札幌周辺地域の魅力を生かした取組についてであります。

先ほどの質疑の中で、北海道全体のブランド価値を高めることや、地域の相乗効果も生んでいくということで、自治体との連携は極めて重要だという部長のご答弁がありましたけれども、私も全くそのとおりでありまして、そのために道と札幌がどういうリードをしていくのかというのは、北海道全体にとって、やはり期待も大きいところだというふうに思います。

スノーリゾートには、食やショッピング、あるいは地域の伝統文化など、様々な要素があると思いますが、やはり主役といえばスキー場だと思うわけでありまして。スキー、スノーボードなどは、様々なレベルの人たちが楽しむことから、それぞれの要望に応えたスキー場の整備と情報の提供は重要な課題だと思います。戦略（案）に示されている広域連携ビジョンでは、ニセコ、ルスツ、キロロ、あるいは旭川や富良野、トマムなどと連携するというイメージの図もあるようでありましてけれども、道内の大規模なスノーリゾートだけが連携対象に一応なっているように見えるのですが、実は札幌周辺にも魅力的なスキー場が点在しており、これらのスキー場との連携という視点も必要

だと思うのです。

例えば、昨年12月にリニューアルオープンした空知の歌志内市にあるかもい岳国際スキー場は、アルペンスキー、競技スキーのトレーニングにも使われる非常にレベルの高いスキー場であるというふうに聞いております。札幌からも約1時間ということでありまして、連携の可能性は十分にあると考えます。

そこで、お尋ねいたしますが、広域連携を図る上で、札幌周辺地域の魅力をスノーリゾートの推進に活用していくべきだと考えますがいかがか、お伺いいたします。

●石井観光・MICE推進部長 札幌周辺地域の魅力を生かした取組についてお答えいたします。

このたびの戦略（案）は、観光客の周遊促進や滞在期間の長期化により、閑散期である冬季の観光消費拡大を図ることが主要な目的でありますことから、札幌を拠点や立ち寄り先としながら、札幌周辺地域のスキー場を含めて道内周遊を促進させることも重要であると認識してございます。

こうしたことから、北海道内の多くのスキー場が加盟している北海道索道協会と連携したプロモーションなどの取組を戦略（案）に盛り込んでいるところでございます。

戦略の推進に当たりましては、札幌周辺地域の魅力的な冬のコンテンツと連携を図りながら、スノーリゾートとしての魅力を高めるよう努めてまいりたいと考えてございます。

●村上ひとし委員 具体的に連携を図ることになれば、競技団体をはじめ、あるいは北海道の観光振興機構、索道協会さんも入るのかもしれませんが、そういったところと連携を大いに進めていただくこと、それから、自治体とも情報を共有しながら、ぜひ進めていただきたいというふうに思うのです。

歌志内市といえば札幌から1時間でありまして、この広域連携ビジョンでは車で2時間の範囲

ということですがけれども、その半分の時間で行くことができるということ、それから、私は調べましたけれども、リフト料金も非常に安いんですね。ですから、札幌から高速道路を使っても元を取れるというか価値があるというふうに言われているようであります。

そして、そもそも歌志内のかもい岳国際スキー場というのは、アルペンスキーの聖地として、全国的にも知名度のあるスキー場であるということと、ここのレーシングチームなどからは、オリンピックで活躍した選手、あるいは世界で活躍する数多くのスキーヤーを輩出してきた歴史もあるようであります。まさに本格的なスキーを楽しみたいという方にとっては理想的なスキー場であるというふうに思いますので、ぜひその点も視野に入れて戦略を進めていただきたいということを申し上げて、私の質問を終わります。

●松井隆文委員長　ほかに質疑はございませんか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

●松井隆文委員長　なければ、質疑を終了いたします。

以上で、委員会を閉会いたします。

閉 会　午後1時56分